

# 特集

---

## 第40回全国中学生 人権作文コンテスト

○「全国中学生人権作文コンテスト」とは

法務省の人権擁護機関では、次代を担う中学生を対象に、人権問題についての作文を書くことを通じて、人権尊重の重要性及び必要性についての理解を深めるとともに豊かな人権感覚を身に付けることを目的として、昭和56年度から、「全国中学生人権作文コンテスト」（以下「作文コンテスト」という。）を実施している。日常の中で見聞きした出来事や体験などを踏まえながら人権について考察を深めることのできるよい機会として、人権教育を所管する文部科学省を始めとする関係府省庁及び全国の中学校の理解と協力の下で実施しており、毎年、全国から多数の人権作文が寄せられている。

応募作品については、法務局職員及び人権擁護委員が一つ一つ読み込み、都道府県単位で実施する「地方大会」において、特に優れた作文の執筆者を表彰している。地方大会で高い評価を受けた作文は、法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会が主催する「中央大会」に推薦され、中央大会における審査を経て、入賞作文が決定・公表される。

また、作文コンテストの終了後は、広く一般の方々にも人権尊重について考えていただくことを目的として、入賞作文を取りまとめた作文集を作成し、法務省ホームページで公表したり、全国の法務局・地方法務局で配布したりするほか、過去の入賞作文を題材とした啓発動画をYouTube法務省チャンネルで配信するなど、人権啓発の資料として幅広く活用している。加えて、毎年12月4日から10日までの人権週間の期間中には、受賞者である中学生が人権作文に込めた思いや社会に期待することなどを新聞記事として取りまとめ、全国紙及び地方紙に掲載することで、全国に広く周知広報を行っている。

さらに、各地域の法務局・地方法務局においても、それぞれの地域の中学生によって書かれた人権作文を基にして作文集を作成・配布したり、地方大会における表彰の様子等を伝える新聞記事を掲載したりするなど、地域住民の関心を引く啓発活動を実施している。



第40回全国中学生人権作文コンテスト入賞作文集



人権週間における新聞広告

○第40回全国中学生人権作文コンテスト

作文コンテストは、回を重ね、令和3年度に通算40回目の節目を迎えることとなった。令和3年度は、全国の6,388校から、中学生のおよそ4人に1人に相当する792,451人

の応募があった。このうち、地方大会から中央大会に推薦された作文は、90編であった。

この90編を人権課題別に見ると、障害のある人の人権をテーマとする作文が最も多く、令和元年度に実施した第39回作文コンテストと比較して大きく割合が上昇した。法務省の人権擁護機関では、2020年東京オリンピック競技大会・東京パラリンピック競技大会の開催を契機として、障害の有無にかかわらず、誰もがお互いの人権を尊重し、支え合う共生社会の実現に向けた啓発活動を実施してきたところであるが、全国の中学生においても、障害のある人との共生に対する意識が高まっており、「心のバリアフリー」が着実に浸透していることがうかがえる。

そのほかにも、新型コロナウイルス感染症に関連して発生している偏見や差別について、ハンセン病元患者に対する偏見・差別の歴史と照らしながら考察する作文、深刻な問題となっている匿名での誹謗中傷に通じる問題を扱う作文、社会全体で議論が続いている選択的夫婦別氏制度にも関連する作文など、近時の社会情勢を反映したものが多数見受けられた。

いずれの作文にも共通するのは、応募してくれた中学生の皆さんが、現代を取り巻く人権問題を自分の問題としてしっかりと認識した上で、将来に向かって前向きに思考する姿であり、作文に記されている素直かつ丁寧な表現は、人権を尊重し合うことの重要性を改めて訴えかけるものであった。

令和3年度は通算40回の節目を迎えたことを記念して、上位入賞作文の朗読動画、高円宮妃殿下から賜ったお言葉、過去の受賞者からのメッセージ等を掲載した特設サイトを開設し、令和4年2月15日から公開している。本特集にも、内閣総理大臣賞を始めとする上位入賞作文4点を掲載している。

これらのコンテンツや、法務局・地方法務局が配布している作文集を通じて、中学生たちの思いに触れ、人権尊重について考えるきっかけとしていただきたい。法務省の人権擁護機関としても、全国の中学生の皆さんが身近な人権問題に思いをめぐらせ、豊かな人権感覚を養っていただけるよう、そして一人でも多くの方々に素晴らしい作文を届けることができるよう、今後も作文コンテストの開催に取り組んでいく。



「第40回全国中学生人権作文コンテスト」特設サイト

内閣総理大臣 賞

みんなのヒーロー

宮城県 仙台市立仙台青陵中等教育学校 3年

松山 陽奈 (まつやま はるな)

困っている人への「手伝います」という言葉。そして優しく見守ること。この二つの言葉と行動を心掛けることこそが優しい社会づくりへの第一歩だと思う。勇気がなくその言葉が出なかった私にそう思うきっかけを与えてくれたのはバスで見かけたおじさんだった。

私は毎朝バスに乗って通学している。そのバスは通勤ラッシュの時間帯で平日朝から晩まで働いてお疲れの様子サラリーマンが多く乗っている。それが理由なのか、車内の雰囲気はどんよりとしていて少し怖いくらいに感じるほどだった。

そのバスがさらに怖さを感じさせる日が週に二日ある。火曜日と木曜日だ。その二日だけ手押し車と共に乗車するおばあさんがいる。手押し車を持っているだけでそれ以外は他のお年寄りと何も変わらないはずなのに……。バス車内から遠目にバス停に並ぶそのおばあさんの姿を確認すると乗客の何人かが分かりやすいため息をつき、その瞬間雑音にあふれていた車内が凍りついたように静かになる。そのおばあさんは何も悪くない。ただ手押し車を持っているからか乗るときに他の人よりも少し時間がかかるだけだ。「手伝います」と誰かが声を掛ければすぐ解決するはずなのに、私を含めて誰もその一言が出てこない。なぜなら、乗客何人かが「乗らないでくれ」という無言の圧力を放つからだ。ため息、舌打ち、コツコツと靴で床を踏み鳴らす音全て意図的に聞こえるように出していて、極めつけは「関わりたくない」と訴える視線。なぜそのような態度をとる人がいるか理由は容易に想像できる。「なんでこんなラッシュの時間帯に乗るのか。こっちは仕事があって急いでいるんだ。」という自分勝手な考えからである。おばあさんがいつどこに行こうがそれは自由で他の人に制約される理由はない。「手伝います」と声を掛けようとしている人も中にはいるはずだが、無言の圧力に負けてしまっていた。そして乗客全員でおばあさんに圧をかけるような状況をつくりおばあさんはいつからか小声で「すみません」と言いながらバスに乗るようになっていた。

ある日、そんな暗い状況の中ヒーローが現れた。ヒーローはおじさんだった。

おじさんは「今日火曜日かぁ」といつものように暗い気持ちで座っていた私の隣の席についた。おばあさんの乗るバス停に近づくとつれ聞こえてくるため息を聞いて「皆さんお疲れですね。」と私に話しかけ、おばあさんがバスに乗ろうとすると「おはようございます。手伝いますよ。」と声を掛けながら手押し車を軽々持ち上げて席を譲っ

た。おばあさんは最初おじさんの行動に呆気にとられていたが、すぐに満面の笑みでお礼を言っていた。そんなおじさんの行動を間近で見た感想は「おじさんは強い。」だった。無言の圧力を物ともせず、私がなかなかできなかったことをスマートにやってのけ、おばあさんを笑顔にしたおじさんはヒーローという言葉がピッタリだった。

私はそんなおじさんの行動に憧れて自分も自ら行動できるようになりたいと思った。

その後おじさんがバスに乗ってくることはもうなかった。が、私はちゃんと行動すると決めていた。一部の乗客のイライラは気づかないフリをした。バスのドアが開くときとても緊張しておじさんみたいにできるか心配だった。でもやるしかないと自分に言い聞かせ、「手伝います」と声を掛けた。手押し車を乗せおばあさんに席を譲った、その後のおばあさんの笑顔とお礼は今でも心に残っている。

おじさんの行動はバスに乗る人たちを変えた。次の火曜日「よし」と意気込んでいたら、前に座っていた高校生に先を越されてしまった。その後手押し車をバスに乗せる担当とおばあさんを支えてバスに乗せる担当という役割分担が自然とできていった。さらにおばあさんが下車する際に運転手さんに「ありがとう」とお礼をするのでつられて他の人たちも運転手さんにお礼をするようになっていった。

おじさんは乗客全員に勇気をもって行動する強さを教えてくれた。おじさんに救われたおばあさんは「ありがとう」と言うことの大切さを教えてくれた。この出来事からバス車内は優しい思いやりがあふれる暖かい雰囲気になっていった。

私たちはできない事があるのが当たり前。でも、その人にしかできないことだってある。そして全ての人自分らしく生きる権利を持っている。だから、自分が輝ける社会を自らつくっていく必要がある。そのためにはお互いの短所を補い合い助け合うこと、優しく見守ること、この二つが一番大切だと思う。

こうした思いやりを広げていくことで、多くの人を笑顔にすることが必ずできる。

一度だけ現れてバスに乗る人全員を笑顔にしたおじさんは、間違いなくみんなのヒーローだ。おじさんに偶然、出会えたことの感謝を忘れず、勇気が出ないときはおじさんのことを思い出して「強く」生きていきたい。

## 法務大臣 賞

### かけがえのないもの

岐阜県 高山市立東山中学校 3年

野尻 夕珠（のじり ゆず）

普段は眠っているけれど、時々目を覚まして私の心を曇らせる思い出がある。小学

生の頃の出来事だ。私は学校が好きだった。友だちとも上手くいっていると思っていた。ごく普通の小学生だった。しかし、その日の出来事は今までの自分の価値観が変わる衝撃的なものだった。

いつも通り次の授業で使う教科書を机の上に用意した時だった。それは鋭く、冷たく私の目に飛び込んできた。

「死ね」

誰かの字で書かれた、たった二文字。私は身体が固まり、自分に流れる血が一気に冷たくなるのを感じた。息ができなくて、涙があふれた。身体の震えはずっと止まらなかった。

私の様子に驚いた友だちが、慌てて先生を呼びに行き、すぐに緊急の話し合いになった。私のそばには心配してくれる友だちがいた。私に起こった事に怒って悲しんでくれる友だちがいた。それでも私は、そんなみんなが怖かった。ずっと下を向いて泣いている事しかできなかった。どんなに話し合っても文字を書いた人は名乗り出なかったし、私自身にも思い当たる人はいなかったからだ。誰か分からない人から向けられた感情は、暗やみで背後から襲われたようでとても怖かった。授業が終わって家までの帰り道は、今日の出来事を両親にどう伝えるか考えていた。それだけしか考えられなかった。あっという間に家に着き、玄関を開けた時に聞こえた母の「おかえり」の声に、また涙が出そうだった。結局、私は自分の口で両親に伝える事ができなかった。こんな気持ちになった事は初めてで混乱していたし、両親を悲しませたくなかったからだ。母は学校からの電話でその事を知った。相談したら困らせてしまうと思ったけど、思い切ってその日あった事、悲しくて怖かった事全てを吐き出した。母は私の目を見てうなずきながら真剣に話を聞いてくれた。そして、私の事をかけがえのない大切な人だと言ってくれた。私のことを想ってくれる人がいる事が分かり、安心して力が抜けた。固まっていた身体が少し緩んだ気がした。次の日学校に行くのは怖かった。やっぱり涙は止まらなかったし、足が震えた。付き添ってくれた母に学校に入りたくないとしがみついた。その時先生や友だちが私を迎えにきてくれた。話を聞くよと寄り添ってくれた先生。いつもと変わらず笑顔で迎えてくれた友だち。私はその日みんなの支えで乗り越える事ができた。しばらく苦しい日が続いたけれど、いつの間にか私は以前のように学校へ通い、友だちと笑い合えるようになった。

しかし、今でも時々思い返すのは私に匿名で感情をぶつけてきた相手のことだ。なぜ名前を隠したのだろう。クラスで話し合いをしていた時はどんな気持ちでその場にいたのだろう。私だけではない、先生や友だち、両親が悲しんでいる姿をどんな気持ちで見ていたのだろう。きっと怖くてたまらなかったと思う。不安で後悔していたと思う。学校が辛い場所になってしまったのではないだろうか。

思い出すと心は曇るけれど、私は今も学校が好きだ。友だちと過ごす事が好きだ。しかし以前と変わった事がある。それは全ての人から好かれる自分でいなくてもいい

と思えるようになった事だ。社会が広がり、繋がる人が増えれば相性の悪い人と出会うこともあるだろう。しかし私には、私のことをかけがえのない大切な一人だと言ってくれる人がある。辛い時に寄り添ってくれる人もいる。その人達の笑顔を守るためにも、私は私らしくいたいと思う。

辛い出来事だったが、私は大切なことを学んだ。それは、顔や名前のない感情は暴力になりうるということだ。両親に想いを込めてつけてもらった名前を隠して感情をぶつける事は、自分勝手に誰も幸せになれない。自由に意見を言える権利と感情をぶつける暴力は全く別のものであり、権利の基には幸せがなくてはならないのだ。感情を声や文字にする前に一度立ち止まってほしい。そして、その言葉や文字に責任をもってほしい。それだけで社会は少し変わると思う。

今の私があるのは、辛い時に支えてくれた人達がいたからだ。だから困っている人や苦しんでいる人に次は私が寄り添いたいと思う。そして自分の行動や発言に責任を持ち、自分の事を大切に生きたいと思う。なぜなら私の心も身体もかけがえのない大切なものだから。誰もが幸せに生きる社会にするために、一人一人が自分の言動に責任をもって後悔のない人生を送ってほしい。誰の命もまた、かけがえのない大切なものなのだから。

## 文部科学大臣 賞

### 「名前」

福島県 須賀川市立第二中学校 3年

須田 琴菜 (すだ ことな)

結婚したらなんていう名前になりたい？

中学生女子のおしゃべりはいつも夢に満ちた恋や結婚への憧れが散りばめられている。

「神宮寺、なんてかっこいいよね。」

「私は好きな人の名前なら何でも！」

あまり近寄りたくない話題なのに、

「琴菜は？将来どんな名前になりたい？」

聞かれてしまった。うーん。言い淀む私に一人が気を使ったように、琴菜はお家を継ぐんだよね。お婿さんをもらうから名前はそのままなんだよね、と言う。あ、そうなんだ。いいね、大人になってもSNSで探しやすいね、と誰かが言い、みんなが笑った。私もほっとしながら一緒に笑う。

私の家は四百年以上続く神社の神主の家系で、その職を継ぐのは私の小さいころからの夢だ。家族も地域の人たちもそれを喜んでくれているようで、それは私にとっても嬉しいことだ。しかし、時々ひっかかる言葉に出会うことがある。例えばさっきの「お婿さんをもらう」もそう。確かに私の家はずっと「神職の須田家」で私には姉妹しかいないけれど、私が神社を守っていくのに「お婿さん」は必要なのだろうか？

新聞やニュースで、「選択的夫婦別姓」という言葉を聞くことが多くなった。夫婦は同姓と定めている今の法律下では、姓を変える側だけが多大な不利益を被ってしまうので議論が進んでいるらしい。日本には慣習的に女性が自分の姓を男性側に変えることが圧倒的に多く、その割合は96パーセント。だからこれは女性の人権問題だとする声大きい。

だけど私には、残りの4パーセントの数字が心にのしかかる。私は将来の夢を目指す限り、一緒になってくれる人に、たった4パーセントの男性しか被らない不利益をお願いしなければならないのだろうか。考え出すと将来を思い描くことが少し嫌になってしまう。同じ悩みを抱えている人はいないのかと調べてみるといろんな意見、解決すべき様々な課題があった。旧姓の通称使用の限界。子の姓決定問題。婚姻に際し選ぶ姓は夫側でも妻側でも構わないのだからその点において公平だという主張もわかった。それでもなお私が将来の伴侶にどこか遠慮をしてしまうのには、もう一つ理由がある。

神社は母の実家で、父が姓を変えた。レアな4パーセントの方だ。父に、名前の変更は大変ではなかったか、と訊ねたことがある。

「ありとあらゆる名義変更。友人や知り合いへの通知。親の説得、自己喪失感。確かに大変だったけど、それよりキツイのはね、」

父は少し間をおいて、お婿さんっていうレッテルを貼られることだよ。と言った。お父さんとお母さんは、ごく当たり前、2人で独立した戸籍を作ったんだよ。その時に妻の姓を選んだ。ただそれだけなんだけど。

「でもお父さんはお婿さんなんですよ？」

という私に父は急に真面目な顔で言った。

「琴葉、覚えておきなさい。結婚するすべての男性は花婿で、すべての女性は花嫁だ。その意味以外の婿、嫁という制度は今の日本には存在しない。婿に来た、とか嫁にももらった、という言い方をきくかもしれないけど、それは誰かを知らず知らずに貶め、不快にさせているかもしれないから、琴葉はよく気を付けようね。」

はっとした。「お嫁さん」は私たちの日常でもよく聞く言葉だ。近所のおじさんは、ウチの嫁さんが、といつも言っている。父の言うことを考えると、それすらも先入観と色眼鏡を通した言葉になってしまう。

以来、ずっと婿や嫁という言葉について私は考え続けている。古い日本の家父長制度の慣習だった嫁入り、婿入りの概念が令和の今も残っている。私の住むような田舎

の地方では今もなお、苗字を変えた男性は「お婿さんなんですね」と揶揄され、女性は「嫁」としての役割を背負わされがちだ。「お婿さんだからかわいそう」「お嫁さんだから名前を変えて当然」悪気はなくても、勝手に貼ったレッテルで誰かの社会的立場を決めつけることでやはりその人の人権を蔑ろにしているのではないだろうかとは感じている。

間違っただけの思い込みを誰かにぶつけること、それが「差別」だと思う。そして差別意識は人権の無視に他ならない。選択的夫婦別姓についての議論もこれからますます必要になるだろう。それと同時に、夫婦がどちらの姓を選んでもそれが当たり前になるよう、社会の成熟を促すことも急務だ。

勿論私だって、中学生女子的「好きな人の苗字になりたい」も素敵な気持ちだと思う。でも苗字がどちらでも、将来のパートナーと私はどんな時も対等でいたい。

だからまずは私から、偏見を含んだ言葉を人に向けないこと。間違っただけの思い込みをしていないか常に見直すこと。私の夢を応援してくれる周りの友達にも、私の考えていることを伝えていこう、と思っている。

## 第40回大会記念 賞

### ウイルスよりも怖いもの

岡山県 岡山学芸館清秀中学校 2年

小西 祥生 (こにし さつき)

「岡山市在住です」

この張り紙を目にしたのは、今年のゴールデンウィークのことだ。私はその時、家族と一緒に岡山市内をドライブしていた。前を走る車のナンバープレートが「多摩」であることに気づいた私は、

「えっ、コロナ患者が多い東京から来ているの？岡山には、まだ患者がほとんどいないのに。嫌だなあ。」

と心の中で思った。しかし次の瞬間、私はハッとした。その車のトランクの蓋には、「岡山市在住です」と大きく書かれた張り紙があったのだ。東京ではなく私と同じ岡山に住んでいると示している。この張り紙なしでは、そのドライバーは安心して運転できないと感じていることが伝わってきた。どうしてこんな世の中になってしまったのだろうか。

当時、新聞やニュースでは「他県ナンバー狩り」が話題になっていた。新型コロナウイルス感染症拡大を恐れた人達の一部は、地元ナンバー以外の車を見かけると、車

のボディに傷をつけたりして攻撃した。私はそのニュースを見るたびに、なんて馬鹿なことをしているのかと腹が立って仕方なかった。しかし、東京のナンバープレートを見たときの自分の反応はどうだろう。もしかすると、自分も彼らと同じなのかもしれない。「感染症」という目に見えないウイルスへの恐怖から、感染の疑いが少しでもある人や場所を自分から遠ざけ、排除しようとする差別の気持ちが、自分の中にも生まれていたことに気づき、とても恥ずかしくなった。

日本赤十字社によると、新型コロナウイルスには三つの感染症の顔があるという。一つ目は、病気としてのウイルス感染症。二つ目は、不安と恐れという感染症。そして三つ目は、嫌悪・偏見・差別という感染症だ。私はこの三つ目の感染症が、実は一番強敵なのかもしれないと感じている。悲しいけれど、特定の病気や患者に対する激しい偏見や差別はこれまでもあったと思う。例えば、ハンセン病がそうだ。

私が暮らす瀬戸内市邑久町には、国立ハンセン病療養所が二つある。地元なので、私は幼い頃、よく愛生園や光明園の夏祭りに家族と出かけた。夏祭り会場のある島に向かう橋を渡るときに、母が、

「この橋は、昔はなかったんよ。ハンセン病になった人達は、家族と離されて島から一生出られなかった。辛かっただろうに。今はこの橋のおかげで、こうやってお互い自由に行き来できる。すごい橋なんよ。」

と話してくれたことを思い出す。

夏祭り会場では、入所されていた元患者さん達が、車いすに乗って盆踊りの様子をじっと見ていた。その中には、口元や耳の形が変わっている人もいた。幼かった私は、最初怖いと感じてしまった。しかし、側にいた大人の女性が元患者さんに普通に話しかけ、一緒に楽しそうに笑っている姿を見たとき、

「ああ、別に怖がらなくてもいいんだ。」

と安心したのを今でも覚えている。あの時の女性の自然で正しい対応を見て、ハンセン病に対する私の恐怖心は、すうっと消えていった。子どもは大人の行動や態度を見て、相手が嫌悪・偏見・差別の対象になるのか判断する傾向があると思う。一人一人の正しい言動は、不安や恐れや差別への抑止力に変わるのだ。あの日の女性のように、私も正しい言動で次の世代の差別を止められる存在になりたいと思う。

夏祭り後も私は小学校で、ハンセン病について学ぶ機会に恵まれた。今ではハンセン病は薬で治療できる病気であること、うつる可能性はほとんどないこと、遺伝しないことなどの事実を学び、ハンセン病が恐れや差別の対象ではないことを改めて確認した。社会見学で光明園を訪れたとき、元患者さんが、

「こんな悲しい歴史がここであったことを忘れないでください。二度とこんな悲しい思いをする人がいない社会にしてください。」

と語られたことが忘れられない。ハンセン病での過ちを私達は決して繰り返してはいけない。それなのに、コロナ禍の毎日で、私達はその学びを活かせていないように

感じる。

考えてみると、ハンセン病と新型コロナウイルス感染症は似ている。守られるはずの患者やその家族が、周囲からの偏見や差別にさらされてしまう点が共通していると思う。しかし、私は学んだ。嫌悪・偏見・差別の元となる不安や恐れを絶つには、うその情報に惑わされず、事実を正しく学ぶことが、とても大切なのだ。

新型コロナウイルス感染症がまた拡大している今、予防を徹底しても、感染してしまう可能性は誰にでもあると思う。その時には、相手を「排除する」のではなく「一緒に治療しよう」という温かい社会を私達で作っていきたい。私達一人一人の言動で、社会は変わるのだから。

